

市民公開講演会

権力の行き過ぎに「おかしい」というのが新聞の仕事

社会は万人が共有する判断力で物事を決めている

六月二十日、協会はホルファートとやまにおいて「混迷する政治、経済状況とメディアの功罪」のテーマで市民公開講演会を開催し、司会を井本正樹副会長が務めました。

講師の中日新聞社社長の小出宣昭氏は、混迷する政治状況をどう見るか、その中で新聞の果たすべき役割などについて縦横無尽に述べました。

政治の混迷「誰も責任をとらない状況」が続いている

政治が混迷していると言われませんが、今に始まったことではありません。日本はこの二十五年間で十七人の総理大臣が生まれています。混迷しているからこそ、総理大臣がくるくる変わるのです。これは日本史上初めてのことではありません。戦前の昭和五年から二十年まで、つまり、太平洋戦争の敗戦までにも同じことがありました。その十五年間で総理大臣が十二人、外務大臣は三十人変わっています。そこまですべていくと会社の稟議書と一緒に、一つの案



小出 宣昭 (こいで のぶあき) 1944年、名古屋市生まれ。早稲田大学卒業。1967年、当時の中部日本新聞社に入社後、社会部記者、ロンドン特派員、社会部長、名古屋本社編集局長などを務める。2007年から東京本社代表。2011年、中日新聞社社長に就任



井本正樹副会長

に、バブル以降からの財政赤字があります。バブルのとき、一番トクしたのは民間の儲けの半分を税金でもっていった官です。では、その膨大な税収はどこへいったのか。当時私は特別取材班を作って調べましたが、大蔵の壁に突き当たりました。資料は膨大にありましたが、専門家がいても複雑でわからないようになっていたのです。

小泉元総理と新自由主義

なんとか解散を免れようとしているにすぎません。それが三党合意の本音だと思います。

バブルの時代、ソ連が崩壊し、日本社会党が消滅しました。そして、私たちの生活にパソコンやインターネットが浸透して来るようになりまし。デジタル社会の到来です。デジタル機器のほとんどは、高度な精密性の高い軍事技術の民生用への転換です。これだけ情報端末まで瞬時に伝わる世論に右往左往してしま

います。外から新しいものがどんどん入ってきて、受け手が未消化のうちに次の新しいものがくることも、混迷の要因のひとつです。もうひとつふれておかなばならないのは、同じ時期に小泉総理が出てきたことです。「改革なくして成長なし」とワンフレーズ政治を行いました。あまりにも繰り返して言っているのです。増税したら社会保障はよくなりますか、ということですが答えはノーです。赤字を補うだけです。役人と政治家が勝手に作った赤字を、なぜ国民が負担しなければいけないのでしょうか。ごく当たり前の疑問です。それを説明しないと国民は納得しません。自民・公明は当然としてなぜ民主が消費税増税に賛成かという、いま選挙をして無職になりたくないからです。

混迷という言葉を使います。混迷という言葉を使うのにはばかばかしい話です。

自由のアメリカ平等の日本その気質の違い

民主主義の根幹は自由と平等ですが、この二つはまったく逆の概念です。片方を伸ばすともう片方は抑制されるのです。アメリカは多民族国家で宗教も多彩ですが平等はありえません。その見返りとして自由が発達しました。一方、日本は基本的に同じ言語を話し、同質社会、同質国家です。このような民主主義国家では圧倒的に平等が強くなり、国民は周りの人たちと同じことで安心し、自由はアメリカほど発達しません。「出る杭は打たれる」わけですから、逆にはアメリカは個人の成功を善とし、そのため

自由な競争を最大限保障します。しかしその代償として、貧富の差がとて大

農耕民族は全員がコソコソ努力すれば計画的に米を育てることができま。まじめであれば、誰もがご飯を食べられます。一方、遊牧民はリーダーの判断によって繁栄したり時には絶滅したりするので、リーダーがとて大切になります。

構成員の平等か、リーダーの自由な裁量か、どちらを大事にしていくのか、これが日本とアメリカとの決定的な気質の差です。社会を構成するすべての人に平等にふりかかってくる、病気、障害、災害などのリスクを国として軽減するのが政治の役割ですが、そのリスク保障にまで個人の選択の自由や企業活動の自由を優先させているのがアメリカの新自由主義だと思えます。日本人には日本の平等というものが染みついていて、日本で政治を行うのにアメリカの得意技(新自由主義)で相撲をとつてもうまくいくわけがありません。

真のコモンセンスとは何か

私たち中日新聞は、脱原発を貫いています。これについては考える余地はありません。人間の生命と環境を大切にするか、それとも経済を大切にするかという優先順位の問題なのです。

いつて平和になるわけではありませ。それはワイマール憲法下であつてもナチスが生まれたことが証明しています。日本国民で六法全

どほとんどいませ。みな警察に捕まらずに生活できるのはコモンセンスがあるからです。社会は、万人が共有している判断力で物事を決めているのです。中日新聞は右派でも左派でもありません。ど真ん中を歩いているだけです。私たちは、コモンセンスに従いど真ん中を歩き続けています。

ネット社会がどれだけ進んでも、権力に対し究極の勝負に出ることができないのは新聞しかありません。新聞のすこぶる記録性であり、消えてなくなりはしません。ネットは現在進行形で動いています。伝搬力があつて一時的利用物としては使えますが、現在だけしか満足できません。それでは、デジタルとアナログは本質的に何が違うのかというところ、飛ぶ文化であり、アナログはその間のプロセスに無限の力があります。デジタルで人生を語つたら、生の次は死しかありません。人生はアナログであり、プロセスは感動を招きます。心を動かし、より人間的なもの

権力を監視することができる

はアナログです。結果ではなく、プロセスが人を愛え、成長させると私は思います。

現在の日本には新聞を直接規制する法律はありません。テレビには総務省が放送法や電波法によって許認可権を持ちますが、新聞社のみが監督官庁がないメディアです。それは、憲法二十一条の言論の自由を持つということを意味しています。だから、共産党や自民党が新聞を持つことができます。でも政党の持つテレビというものはありません。このように、同じマスメディアでも、テレビと新聞は決定的に違います。

また、新聞社は株式会社ですが、商法の特例として株を公開してはいけないことになっています。新聞社は株式会社として同じ商品をつくることのできないメーカーと言えます。現在、新聞社は株主から集めた資金で、新聞をつくることに使っています。新聞社とは新聞をつくるメーカーですが、ただの一度として同じ商品をつくることのできないメーカーと言えます。現在、新聞社は株主から集めた資金で、新聞をつくることに使っています。

紅葉真っ盛りの 天蓋山・有峰をゆく

第4回 山歩き会

開催日 10月28日(日)

定員 30人

参加費 4,000円(貸切バス利用)

対象者 会員および 家族・従業員・知人

山頂からの薬師岳・北ノ俣岳方面

天蓋山(てんがいざん)岐阜県、標高1,527m。岐阜県神岡を過ぎて双六溪谷から山吹峠を越え、山の村キャンプ場が登山口。単純標高差591m。手軽に登れて山頂からの眺望が抜群。復路は錦秋の有峰を抜けて富山市に戻る。

*詳しい日程、集合場所、費用などは後日お送りするチラシを参照してください。